

昭和38年2月28日第3種郵便物認可 平成21年5月25日印刷 キヤノンフォトサークル6月号通巻588号 毎月1回1日発行 平成21年6月1日発行

Canon Photo Circle 6

キヤノンフォトサークル
No.588 JUNE 2009

特集

EOS 5D Mark II SPECIAL GALLERY
「南海の光・小笠原」

志水哲也



Canon Photo Circle

Canon

昭和38年2月28日第3種郵便物認可 平成21年5月25日印刷 キヤノンフォトサークル6月号 毎月発行 定価500円(税別) Printed in Japan

No.588 JUNE 2009

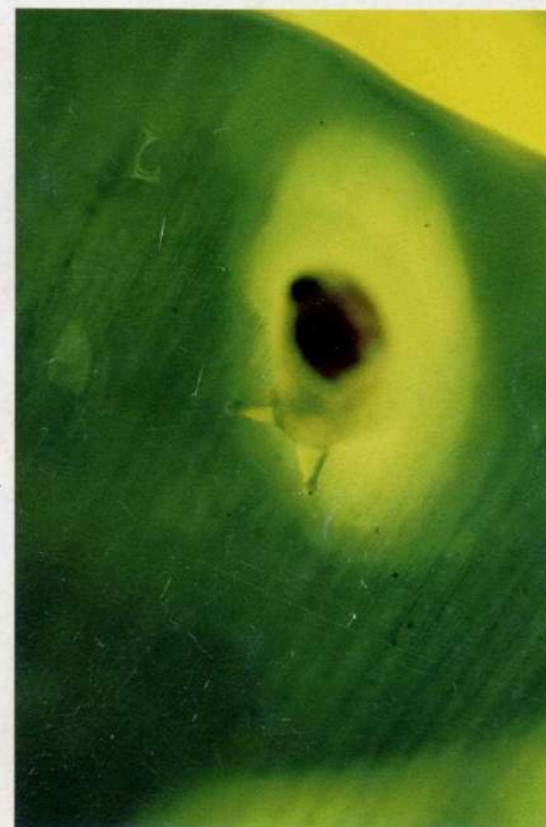
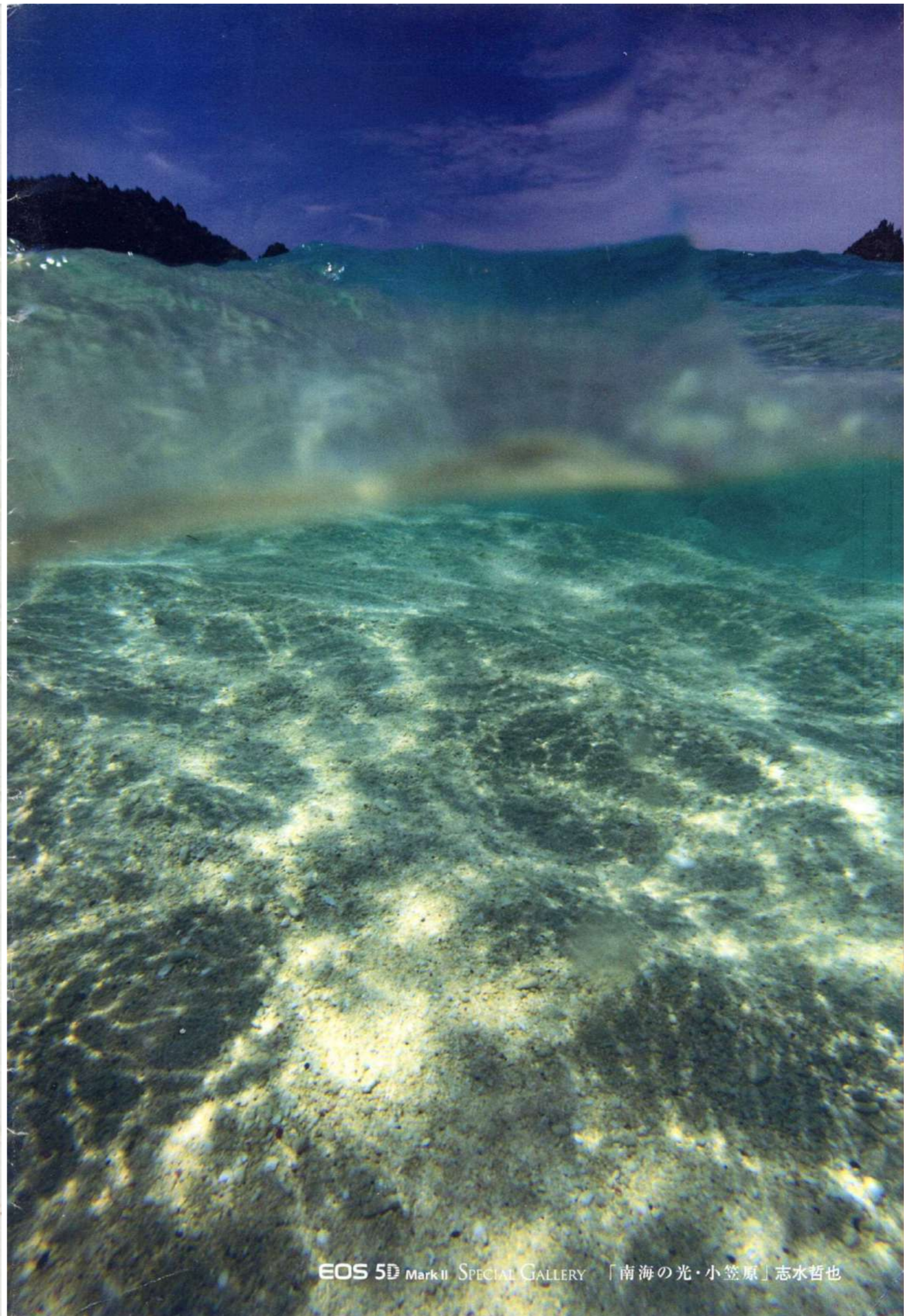


photo by Tetsuya Shimizu



南島屋池 1000年前に絶滅したカタツムリの貝殻

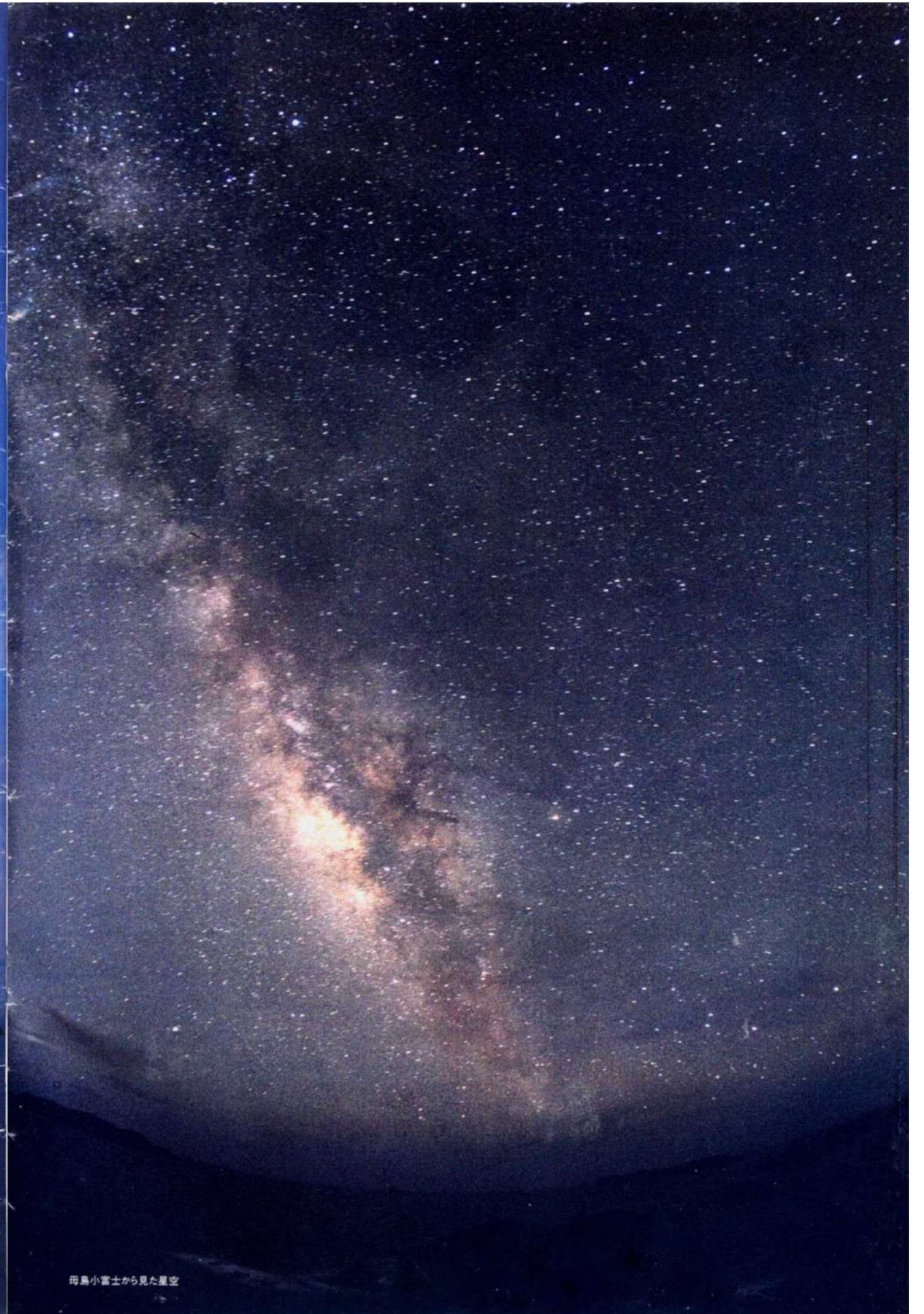
父島ジニービーチ 半水中



EOS 5D Mark II SPECIAL GALLERY 「南海の光・小笠原」志水哲也



母島小富士から見た朝の空



母島小富士から見た星空



母島 ムニンヒメツバキに着生したツルダコ



父島 タコノキ



母島 テリハマボウの花(夕方花びらがオレンジ色に変わる)



母島 オガサワラオカモノアラガイ(原始的なカタツムリ)



南島 1000年前絶滅したカタツムリの貝殻を付けたヤドカリ



父島 グリーンベベ(光るキノコ)

十代から憧れ続けた秘境・小笠原への旅。 貴重な生態系をもつ「神秘の島」の本質を伝えたい。



志水哲也

1965年、横浜生まれ。高校時代から山登りを始め、国内外での単独登山、黒部全支流巡回など登山家として知られる。'97年、宇奈月町(現 黒部市)に転居、写真家としての活動を本格化。2004年、駒沢大滝の撮影を巡ったドキュメンタリー「黒部幻の大滝に挑む」(NHK総合)で一躍脚光をあびる。現在は「水」を軸に日本の自然の深みと特異性を写真で表現しようと試みている。写真集、エッセー集を数多く出版。全国のキヤノンギャラリーで写真展「幻の滝・南海の光」を開催中(詳細はweb.canon.jp/gallery)。

●志水哲也ウェブサイト
http://www3.nsknet.or.jp/~guriguri/

SHOOTING DATA

(ボディはすべてEOS 5D Mark II)

表紙	EF15mm F2.8フィッシュアイ F7.1・1/200・1/3補正・ISO100 (母島 南崎沖の船から小富士)
P2	EF16-35mm F2.8L II USM F22・1/200・1/3補正・ISO400
P3	EF15mm F2.8フィッシュアイ F22・1/50・+1補正・ISO200
P4	EF15mm F2.8フィッシュアイ F5.6・81秒・ISO6400
P5	EF16-35mm F2.8L II USM F8・1/60・ISO200
P6	EF14mm F2.8L II USM F18・1/40・1/3補正・ISO1600
P7	EF15mm F2.8フィッシュアイ F9・1/100・2/3補正・ISO800
P8(上)	EF100mm F2.8マクロ USM F5・1/320・+1/3補正・ISO800
P8(下)	EF100mm F2.8マクロ USM F2.8・15秒・ISO6400
P9(上)	EF100mm F2.8マクロ USM F13・1/320・+2/3補正・ISO800
P9(下)	EF15mm F2.8フィッシュアイ F22・1/40・+1補正・ISO200
P10	EF16-35mm F2.8L II USM F9・1/320・2/3補正・ISO200
裏表紙	EF100mm F2.8マクロ USM F2.8・1/80・+1/3補正・ISO800 (母島 オガサワラオカモノアラガイ)

小笠原に行くことを夢見ていたのは、私が18歳のころのことでした。2万5000分の1の地形図を眺め、まだ見ぬ小笠原をイメージしながら、小笠原の地形や風景を想像していました。当時は小笠原といえば「秘境」の代名詞だったので。地図を眺めて憧れていた私も現在は43歳。黒部(富山県)を活動の拠点に、登山家、山岳ガイド、山岳写真家として歩んできました。黒部と小笠原は遠く離れています。が、いつも気になっていました。

そして今回、小笠原を撮影する機会が与えられたことに感謝しています。わずか20日間の滞在でしたが、ときめくままにシャッターを切り、撮影にのめり込んでいました。ずっと憧れ続けた小笠原への、四半世紀の恋が、ようやくかなったと思います。

他の陸地と隔絶されているため固有の動植物が豊富なエリア。小笠原は正式には「小笠原諸島」といって、父島、母島、硫黄島、沖ノ島などを含む大小32の島々によって形成されています。人が住んでいるのは父島、母島の2島だけ。行政区は東京都ですが、都心からはおよそ1000kmも離れた洋上に隔絶された地域です。父島へのフェリーは東京港から1週間に1便のみ、片道25時間30分かかります。飛行場はありません。ハワイやガラパゴスと同様に大陸とは接することがないので、小笠原だけが数多く存在しない固有の動植物が数多く存在します。今回ご覧いただいた作品は父島と母島、嫁島で撮影したものです。が、「東洋のガラパゴス」と称されるのがよくわかります。原生林を歩く

と見たこともない植物や花がたくさん見られ、珊瑚の海の美しさにも自然美の神秘性を感じるほどでした。撮影機材が進化するなかで重要なのは振り手の遊び心。今回の撮影に使用したカメラはEOS 5D Mark II。2110万画素という十分な画素数を備え、画質はますます向上しています。それでいて適度にコンパクトであることもうれしいですね。常用ISO感度を6400まで上げられるので、星空の撮影が面白くなりました。月明かりに頼らなくても地面の岩などシャッター部まで、星空といっしょに1枚の写真に写し込むことができました。機能豊富で高性能なデジタルカメラを使うにあたって必要なのは、作品づくりへの「遊び心」ではないでしょうか。フィルムでも撮れるものをデジタルでそのまま撮っても面白くないと考えています。山岳写真の世界ではとくに、被写体をありのままに撮ることをよしとする傾向があります。その枠にとらわれず、遠隔操作による撮影や空を飛びながらの撮影など、新たな映像表現へ向けて可能性の扉が開かれています。私は写真とは、自分を表現する作業だと思っています。たとえば命がけで被写体に向かっていくときの姿勢は、作品に表れると信じています。それは戦争写真においても顕著ですが、動物写真でも風景写真でも同じで、被写体に挑んでいく緊張感のようなものが作品に生命を与えるのだと思います。たとえ自然風景でも、一歩でも人より踏み込んでいく姿勢で撮り続けていきたいと思っています。



嫁島沖マグロ穴